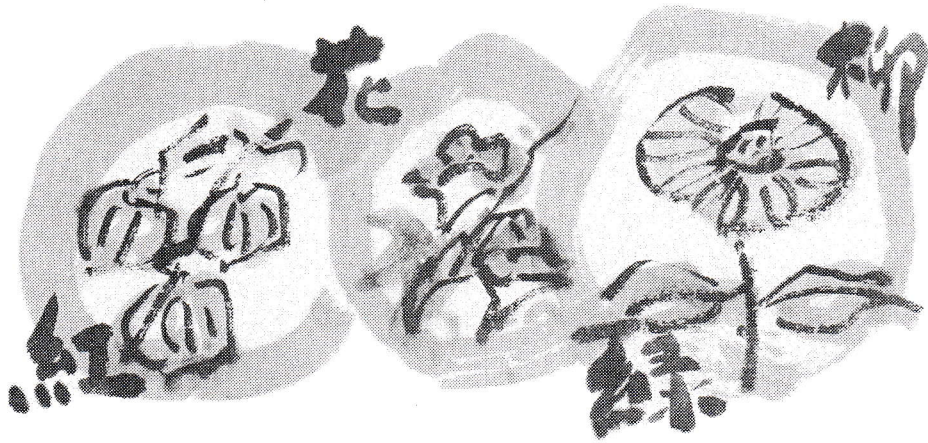


土風

第九号



砺波郷土資料館土蔵友の会

加賀傳燈寺の身代り地蔵と 地蔵半跏像

尾田 武雄

一、はじめに

金沢市伝燈寺町に所在する臨済宗妙心派寺院の瑞応山（または宝龜山）傳燈寺は、本尊が釈迦如来で、延慶元年（一三〇八）に恭翁運良によって開かれた古刹である。この伝燈寺町は、金沢市中心部の東方にあり、金腐川の中流右岸に位置し夕日寺村の南東にある。

富山県井波町から、福光町そして金沢市二俣を抜けて金沢に至る古い旧道沿に伝燈寺町がある。この旧道は、俗に真宗の道ともいわれている。この交通の要所に傳燈寺があるのである。

この傳燈寺を開いた恭翁運良は、臨済宗法灯派の僧で、諡号を仏林慧日禪師といった。羽咋永光寺の瑩山紹瑾について、曹洞禪を学び臨済宗法燈派の無本覚心の法嗣となる。また京都万寿寺に南浦紹明を訪ね、その後羽咋永光寺の瑩山の命で加賀大乘寺、真光寺に住した。越中では、放生津に興化寺、兜率寺の二か寺を建立した。また『名僧



傳燈寺參道



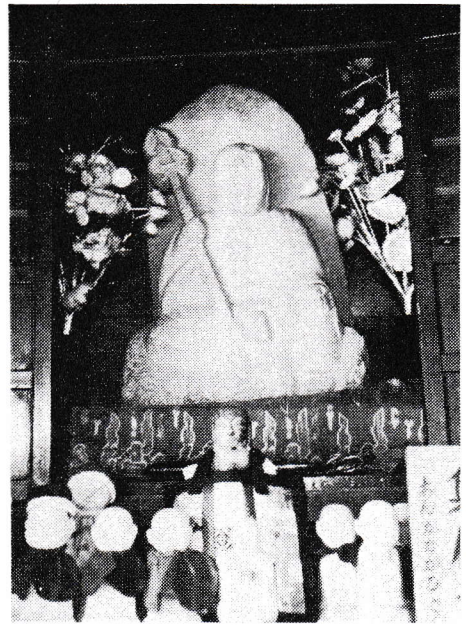
傳燈寺全景

行録』には、氷見市の唐島に灯台のような石造物を建立し、海上交通の安全を図ったとも伝えられる。また門弟に傳燈寺二世至庵綱存、長慶寺開山絶巖運奇、また砺波市安川の薬勝寺開山で健仁寺五十三世桂巖運芳、蓮華寺開山の吞象運光らがいる。ところでこの傳燈寺には、恭翁運良の開山にまつわる石地蔵の伝承がある。この石地蔵についていろいろ検証してみたい。

二、傳燈寺と身代り地蔵

傳燈寺は、もと法灯派であった。加賀の五山派の有力寺院で、明応七年（一四九八）越中亡命中の足利義材に十刹位を認められ、永世十二年（一五一五）に勅願所となった。

その後、一向一揆の勢力に実質的に入り、近世では加賀藩の援助を得て妙心派の触頭となった。



身代り地蔵

当寺の本堂には、製作年代が鎌倉時代にさかのぼるとされる釈迦如来坐像があるが、その左の厨子の中には石の地蔵半跏像が鎮座している。これは当寺では「身代り地蔵」と称されている地蔵である。

この地蔵は、恭翁運良が傳燈寺を開基した時にまつわるものとされている。このことについては傳燈寺保存会編『加賀傳燈寺―歴史資料調査報告―』（平成六年刊）の「第七章 縁起・伝承・地誌」に詳しく記されている。それによると「傳燈寺地蔵縁起」（傳燈寺所蔵本）、「加越能金砂子」、「加賀志徴」、などである。これは傳燈寺が開創前、恭翁運良が地蔵堂に一宿し、その折り押し入った山賊が、恭翁を切りつけたが、石地蔵が身代りになって切りつけられ、山賊を改心させたというものである。切りつけられた地蔵が、本堂の厨子の中にある地蔵である。事実、顔面が削られている。

この地蔵に関しては、『加賀傳燈寺―歴史調査報告―』の「石造遺物」には「本堂の厨子内に安置されており、「身代り地蔵」と呼ばれている。舟形の光背をもち、左足を踏み下げた半跏型式の像である。

着衣の彫出は浅い。右手に錫杖、左手に宝珠を持っている。錫杖の頭部は連結した環状となり、環内に塔婆形を造り出す。顔面は削られている。総高六十センチ、台座六十一・五センチ、同高さ十三センチを測る。像高四十五・五センチ、膝張り三十二センチ、肩幅十九センチ、右側面を見ると、台座の厚さ七・五センチ、像は最も厚い所で十六センチ、頭部の厚さ九・五センチを測る。石材は凝灰岩である。

石川県内における地蔵菩薩半跏像は、金沢市普正寺遺跡や石川郡鶴来町白山町、鳳至郡能都町柿生に例があり、いずれも中世の所産とみられている。本像はこれに比べて、着衣の彫り方や像容の仕上げに後出的な様相を窺うことができる。」とある。

この報告のとおりである。私も数回となくこの地蔵を拝観してきた。砺波地方にもこのような中世まで遡る石造の地蔵半跏像は、神社などで時折見掛けることがある。このことでは『土蔵』第七号「白山信仰」と地蔵半跏像石仏のひろがり」で述べたとおりである。この地方では、十二体の地蔵半跏像を報告した。その後、『氷見春秋』第三十二号では、氷見地方の三十六体を調査報告した。また能登・加賀地方では、二十四体を『氷見春秋』第三十三号で調査発表した。

これらは、制作年代が鎌倉時代から室町時代と思われるものである。ところで、この傳燈寺の「身代り地蔵」と称される地蔵半跏像は、私は、室町時代の中期から後期にかけて造立されたものではないかと推定し、恭翁運良が生きた時代より、時代が下るものと思われるのである。

三、地蔵半跏像と白山信仰

地蔵半跏像と白山信仰と大上段に構えてもその資料は、ほとんどのものが現状である。しかし、正徳二年（一七一二）に加賀藩の神社奉行の命を受け、各村の十村にそれぞれの管下の堂宮を調べて郡奉行に提出したいわゆる「正徳二年九月堂宮社人山伏持分百姓持分相守り申書上ゲ申帳」（河合文書）（俗に「正徳二年社号帳」という）によると、白山社が射水郡に五十一社、砺波郡に十五社がある。

そこで前でも述べたが、明らかに近世仏でない地蔵半跏像が、射水郡に三十六体、砺波郡に十二体を確認しているが、それらの多くが白山社との関わりが認められる。その堂宮に安置してあったのではないかと、思われるのである。

能登・加賀の二十四体も、白山信仰との関わりが認められるのである。たとえば、加賀鶴来町白山町にある「かたがり地蔵」は、手取川の溪谷にそそり立っていた舟岡山の岸壁に彫り込まれた磨崖仏であった。それが明治三十一年から始まった手取川七ヶ用水の取水合併工事に伴う道路新設工事によって、切り取られ現在地に安置されたものである。この地蔵半跏像の磨崖仏は、「妙法の石室」にあったものとされ、鎌倉時代の造像とされている。

またやや小振りであるが、富山県福野町の安居寺の通称「地主地蔵」とよばれる県指定文化財の地蔵半跏像もまた鎌倉時代の造像とされている。これら「かたがり地蔵」や「地主地蔵」のコピーのような地蔵が、白山信仰の広がりをもつ富山県西部や能登半島に、広く分布しているのである。

四、曹洞禅と白山信仰

明らかに近世仏ではなく、地蔵半跏像の石仏が、富山県西部や能登半島に広く分布しているが、それらは白山社などの神社や禅宗の寺院に多く見られる。

そこで、禅宗寺院と白山信仰について検証してみたい。広瀬良弘著『禅宗地方展開史の研究』によると（曹洞禅は）最初北陸に展開したことから、曹洞宗は加賀白山信仰と密接な関係にあるともいわれている。この問題は初期曹洞宗教団を考える上で重要であるが、それ以降の曹洞宗の展開の中でも、白山神との関係は重要な意味を持つようになる。白山神が護伽藍神として、あるいは鎮守として、寺院の裏山に祀られているということが少なくない。」とされている。

また白山総合学術書編集委員会編『白山——自然と文化』室山孝「白山と宗教文化」でも「明治以前、曹洞宗寺院の多くは鎮守として白山神社が勧請されていた。」という。

ところで、地蔵半跏像が曹洞宗や臨済宗の禅宗寺院にやや多く見られるというのは、上記の意味を持つのだろうと思われる。たとえば、氷見地方では堀田の曹洞宗延暦寺の門前の地蔵堂の中に、余川の臨済宗興聖寺の境内に、高岡市太田臨済宗国泰寺派本山の近くの松太枝神社内の地蔵堂に二体ある。江道の元手洗野の曹洞宗信光寺があったとされる円通庵跡にもある。岐阜県金岡町西茂住の一体は、曹洞宗の檀家の旧家の庭にあった。

また能登半島などでは、七尾市太田の曹洞宗海門寺山門前に、それに傳燈寺の「身代り地蔵」である。

これらは白山修験によつて運ばれたものとするのは早計だろうが、地蔵半跏像が白山神としても理解されていたと考えられるのではないかと思われる。

五、恭翁運良と地蔵

恭翁運良と地蔵との関わりを、端的に示しているものに、傳燈寺の開創に関わる伝承がある。恭翁運良が地蔵堂に一泊し、その折りに出会った山賊に切りつけられ地蔵が身代りになり、切られて改心させたというものである。それが当寺の本堂である「身代り地蔵」にまつわるものである。



恭翁運良像

ところで恭翁運良については、「名僧行録」(『大日本資料』第六編之六)に詳しく記されている。そこには、「氷見海浜有岩石屹乎波心、師於其上、建石浮図、蓋師之心欲来往舟船、乃至海中鱗介類、游泳于塔影者、共得結縁也、」とある。「名僧行録」は、五山禅僧の華獄建胄が寛正四年(一四六三)に作成したものである。ここには、氷見沖の唐島に灯台のような石造物を作ったとしている。

唐島は氷見漁港の沖約三〇〇メートルのところの位置する。『氷見市史』(一七二頁)によるとこの地蔵は「唐島の南がわの地蔵は、海難のとき灯をともして舟を導いてくれるという」とある。また『氷見

の伝承』(昭和五十七年刊)によると「比美町港の海岸の向かいに見える島は昔、唐の国から贈られてきた島だということで名高い、氷見漁港から約十町ほど離れた海中にあるこの島の登り口の左側の岸壁に、高さ約四尺余りの石地蔵が安置してある。伝えるところによると天長二年(八二五)弘法大師が北国巡歴のみぎり、唐からきた靈験あらたかな嶋田と聞かされ、漁師の案内で島に登られた。さっそくこの岩かげで三十七日間の参籠修行をされた。めでたく宿願を成就され深い感動を覚えられた。さきに案内してくれた漁師たちの漁の姿をおもい浮かべられたりした。

毎年毎年、漁をする舟が海に漕ぎ出し、途中、あらしにあつて生命を失う者も数知れずいるとの話に心痛めておられた。そこで宿願成就のお礼と水難防止の大願をたてられて、自ら刻まれた地蔵であるといわれている。

かつて灯台の設備がなかった頃には、あらしがやがてやってくるという前には、この地蔵が怪しい光りを放される。そのさまを見た舟はたとえ漁の途中でも、急いで浜に引き返したと言う。ふつかりこれを無視して漁をしていたりすると、激しい風波がおこり舟もろとも海のもくずと消えてしまう。このようなあらしを予告してくだされる尊い地蔵様だとよろこばれている。

何百年もの間このことが代々語り継がれて、やがてだれいともなく『火ともし地蔵』の名で漁師たちからあがめられてきた。燈台ののなかつた何百年もの間、氷見の漁師たちはこの地蔵を心の支えとし、怪しい光の感じられるときは急いで帰港するのが常とされてきた。

今でも毎年五月三日には、島の祭とあわせてこの地蔵尊の供養をし、

海上安全の祈願と感謝の法要を営み参詣している。この日には漁船はそれぞれに大漁旗をおしたて、光禪寺の和尚にしたがつて島にのぼり、法要に参詣するいでひととき海に花がさいたように美しい旗の波がみられる壮観差である」とある。

光禪寺は曹洞宗で海慧山の山号であり、暦応年間（一三三八―四二）明峯素哲の開基である明峯素哲は加賀富樫氏の出身で、建仁寺をえて加賀大乘寺の瑩山紹瑾の侍者を努め、加賀伝灯寺の恭翁運良らに参禪した。

ここには石造の地藏半跏像があるが、それを「唐島の火ともし地藏」といわれている。

六、「名僧行録」にみる恭翁運良

「名僧行録」には、「大日本国越中州黄竜山興化護国禪寺開山勅賜仏林恵日禪師行状」（『富山県史』資料編Ⅱ中世二三―五頁）とあり、氷見沖の唐島こと前に記したが、恭翁運良の「行状」が実に詳しく記されている。

この中に「住居白山之麓真光寺、時徒衆多染瘟、寺之土地妙理権現也、師呵之投河、」というくだりがある。これは、真光寺の衆徒が疫病に罹り、恭翁運良が寺地の妙理権現（白山権現）を呵って河に投げ付けた。すると衆徒の病気が直ったというのである。また小矢部市埴生八幡では、廟中に向けて放尿をしたという。傑僧としての恭翁運良が浮かび上がってくる。

しかし白山権現を呵って河に投げ付け、衆徒の病気を直したというくだりには、興味深いものがある。広瀬良弘著『禅宗地方展開史の研

究』（五三頁）では「恭翁運良が無条件で、旧宗教勢力と妥協する態度をとらなかつたことを意味する。また、恭翁が従来の白山系の天台僧や修験者とは異なつた呪術力を示したことを意味するものと考えられよう」とある。納得できるものであるが、身代り地藏に助けられたとする傳燈寺開創にまつわる伝承。そして白山権現を河へ投げ付けることの行為、そこには、庶民宗教から遊離した白山信仰に対する抗議があつたのではなからうか。傳燈寺開創にまつわる伝承には、庶民側に立つた姿勢が見えてくる。

ところで、恭翁運良は、氷見沖の唐島に石塔を造つたとして、広瀬良弘著『禅宗地方展開史の研究』（五八頁）では「大石造物といへば鎌倉の忍性塔に代表されるように、律宗関係の人々にかかわるものが多いといわれている。その場合にも、その律僧たちの周辺にいた石工たちがことが問題となるが、恭翁運良の周辺にも、石工たちの存在が考えられるのではないだろうか。」とある。結城に安穩寺を開いた源翁心昭にまつわる伝承に那須で人や鳥獣に害を与えていた殺生石を砕き、退治した禅僧と知られている。このことから、石を砕いたりする鎚のことを「ゲンノウ」というようになったのである。このように、石工との関わりをしめすのである。

「時衆過去帳」（『富山県史』中世資料編Ⅱ一四二頁）に「越中石大工 時阿弥陀仏」の名がみえる。これと恭翁運良との関係はわからない。

七、地藏半跏像の破壊

傳燈寺の身代り地藏は、恭翁運良の身代りになり山賊に切りつけら

れたが、実際には顔面が削り取られている。地蔵が切られたというより、故意に顔面を削られたといえる。

傳燈寺の身代り地蔵は、その彫法、像容、また石材などから、恭翁運良の生きた時代より時代は下るものと思われる。地蔵と恭翁運良を考えるには貴重な伝承ではあるが、時代があわない。

氷見地方を中心とした富山県西部、能登半島などには、中世に造像された地蔵半跏像が多いが、それらのほとんどが、顔面が削り取られ、錫杖や宝珠も欠落している場合が多いのである。それも明らかに、人為的にまた積極的に破壊されているのである。

たとえば、鎌倉時代の造像とされる鶴来町白山町にある「かたがり地蔵」は、顔面や錫杖の頭部、宝珠が削り取られている。また志雄町散田の地蔵半跏像も顔面や錫杖の頭部、宝珠が削り取られている。顔面は右半分が欠落していた。この地蔵を管理している人によると「頭が、欠落しているのは、魂をぬかれていてだめだ」と説明された。

これは、シルクロードのバーミヤン溪谷（アフガニスタン）の大磨崖仏の顔面が異教徒によって破壊されているイメージと似ていると思われる。

八、おわりに

傳燈寺には数回となく訪れることができた。そのたびに、宮崎元良師は快く向かえて下さった。初めてこの寺を訪ねた時、私の専門以外である珠洲焼如来形立像を拝見することができ、後にそれが鎌倉時代初期の制作で、加賀地方で初めての確認であることを知った。その後、平成七年八月二十四日の傳燈寺の地蔵まつり（身代り地蔵）に、私が

身代り地蔵や珠洲焼如来形立像との

関わりなどを、講演をする機会をあたえてくださった。

地蔵半跏像を地元の砺波市祖泉神社前の小堂で出会って、砺波地方全域

に捜し求め、それから富山県全域と求め歩き、岐阜県神岡町まで行った。その後氷見地方に多く、拝見し、能登半島や加賀までの巡礼の旅が続いた。

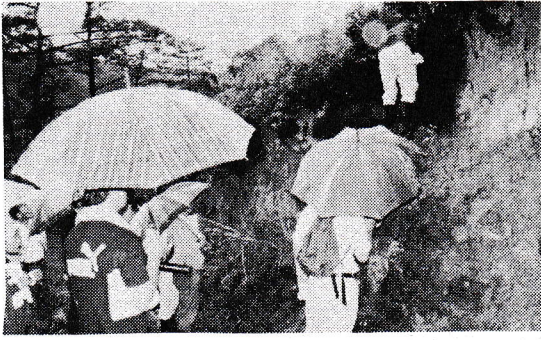
傳燈寺に身代り地蔵を拝見したとき、私の旅も小休止に入ったように思われる。



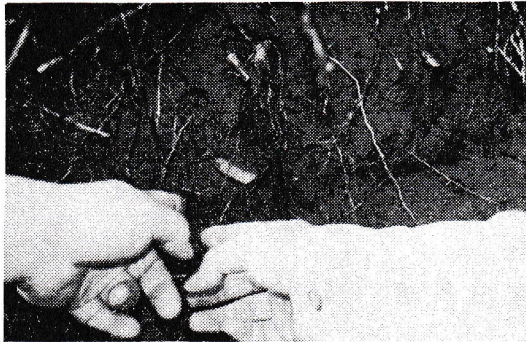
珠洲焼の陶仏

8月24日 大堤周辺の遺跡をたずねる 指導 安念幹倫会員 14名参加

福山大堤周辺



撮影 川原国昭



8月28日・10月6日 市民大学講座「砺波平野の屋敷林」 新藤館長
国民文化祭「公開民家の見学」

資料館
市内

12月7日 福山の須恵器窯跡の範囲確認ハイキング
指導 安念幹倫会員

11名参加

旧福山窯業地内



毎月第2金曜日 調査学習会「千光寺の古文書——整理と分類と古文書の読み方」
指導 新田二郎先生 斉藤善夫先生 金子宰大先生

千光寺

あとがき

- ▶「先人の魂を訪ねる熱い思いがほとばしっている」と土蔵へのファンレターを寄せてくれた野村泰則氏の言葉どおり第9号はことのほか充実し、読みごたえのある内容で送り出すことができたことを喜びたい。
 - ▶新会員の間馬氏の紹介で県ナチュラリスト協会顧問松岸得之助氏の「桜雑記詳解」を17頁に亘り一挙に掲載したが、興味深い論文、エッセイであれば会員外の方にも門戸を開くをよしとすべきか、どうか、経費の面もあるので広く会員のみなさんの意見を聞かせてほしい。
 - ▶次号は「土蔵創刊10周年記念号」となるが、何か意義のあるプランがないか、知恵を出してもらいたい。(I)
- 編集委員 尾田武雄・原田典子・老松邦雄・白江秋広・市谷 博

土 蔵 第 9 号

平成9年5月1日

発行 砺波郷土資料館 土蔵友の会
会長 藤 井 武 雄

編集事務局 尾 田 武 雄

〒939-13 富山県砺波市太田1770
TEL (0763) 32-2772

印刷/となみ印刷出版